

Title	ウィリアム・モリス・デー/没後100年記念
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53017">https://doi.org/10.18910/53017</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 〈ウィリアム・モリス・デー／没後100年記念〉

特別講演 多田 稔／大谷大学文学部教授

研究報告 水島ヒロミ／大阪芸術大学, 藪 亨／大阪芸術大学, 藤田治彦／京都工芸  
繊維大学, 羽生 清／京都芸術短期大学, 白石和行／大阪市立工芸高校,

今井美樹／サントリー・ミュージアム [天保山]

研究報告懇談会 司会：宮島久雄／京都大学

第38回意匠学会大会は、ヴィクトリア朝を代表する詩人でデザイナーでもあったウィリアム・モリスの没後100周年にあたった。そこで大会2日目には、モリス記念行事として、モリス研究の現状に関する特別講演、芸術とデザインに関するモリスの生涯を年代順に論じた一連の研究報告そして講演者も加わっての研究報告懇談会が、以下のようなプログラムに沿って実施された。

午前の部においては、まず研究報告1が『北フランスとモリス』と題して水島ヒロミ会員によって行われた。本報告では、モリスによる大陸への旅行(1854年, 55年, 59年)の、中でもゴシック大聖堂との関わりが論じられた。その際重要とされた資料は、『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』(1856年発行)の中に納められているロマンス、『知られざる教会の物語』(1月号)とエッセイ『北フランスの教会I, アミアンの影』(2月号)である。そして、大聖堂が、中世主義の渦中に身を置くモリスの目には一体どのように映っていたかということが報告された。

次いで研究報告2が、『〈芸術の宮殿〉とモリス』と題して藪亨会員によって行われた。モリスは、ジェイン・バーデンと結婚を約束したとき、美しい住まいを「私自身のささやかな〈芸術の宮殿〉」として将来の妻子のために用意することを決意し、「赤い家」の建設に取り組む。しかも、かねてより装飾芸術に関心を寄せていたモリスの芸術仲間たちは、

「赤い家」での喜ばしい共同制作を機縁にして、良質な家具や造作のデザインと製作を請け負う商会「モリス・マーシャル・フォークナー商会」を創設するのであった。本報告では、こうした60年代におけるモリスの装飾芸術への道程が論じられた。

さらに研究報告3が、『1870年代のモリス』と題して藤田治彦会員によって行われた。本報告では、70年代におけるモリス、ジェイン、ロセッティの三角関係の進展、アイスランド旅行(1871年)、モリス商会の改組と単独経営(1875年)、東方問題協会への参加(1876年)、古建築物保護協会の創設(1877年)、全国自由同盟への参加(1879年)などが論じられた。そして、70年代がモリスにとってあらゆる意味でテンションが高まり、苦悩しながらも、まさにそれらをバネにして、自己の人生の新たな段階へと飛躍する時期であったことが報告された。

次いで、午後の部においては、まず特別講演が、『ウィリアム・モリス再考』と題して大谷大学文学部の多田稔教授によって行われた。ヴィクトリア朝の始まりからその末期の世紀末にかけて、ヴィクトリア朝の様々の様態に強いかかわりをもちつつ成長し、その時代精神を体現し、ついには時代を駆け抜けて来たるべき世界を高い調子で予言したウィリアム・モリスが逝ってから今日まで、モリス研究はまずJ. W. マッケイルによる評伝『ウィリアム・モリスの生涯』(ロングマン社, 1901年)に始まり、昨年の没後100年を機に

ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で開かれた『モリス展』に至っている。本講演では、こうした現状を踏まえて、モリスの実像に迫りモリスの現代的意義が論じられた。

そして小休止の後に、研究報告4が、『葎泥棒——モリスの夢と現実』と題して羽生清会員によって行われた。50年代の油彩画『王妃グウィネヴィア』や詩集『グウィネヴィアの抗弁』から、80年代のロマンスを裡に潜めたパターンの数々、そして90年代の聖杯シリーズのタペストリーへと、モリスのデザインと社会主義にはいつも序列なしに集う円卓の騎士たちの物語が息づいていた。本報告では、理想に向かっての日々努力することのうちにこそロマンスが花咲くと思いつめたモリスが、それを布に染めて室内を飾り現実に夢を織り込んでいったことが論じられた。

次いで研究報告5-1が『モリスの写本と刊行本について——ケルムスコット・プレス以前の書物のデザイン——』と題して白石和行会員によって行われた。本報告では、ケルムスコット・プレス以前の彼の写本と刊行本の制作が取り上げられ、ケルムスコット・プレスにおけるモリスの書物のデザインの源泉が写本にあったと考えられることが報告された。

さらに研究報告5-2が『ケルムスコット・プレスの書物とデザイン』と題して今井美樹会員によって行われた。本報告では、モリスの晩年の仕事であるケルムスコット・プレスについて、その設立の経緯と活動の内容が取り上げられ、モリスが近代書物デザインに及ぼした影響がヴィクトリア朝の印刷状況を踏まえて論じられた。

そして最後に研究報告懇談会が、宮島久雄副会長の司会によって、特別講演者を含めた7人のパネラーを囲んで行われた。パネラー各自がこれまでモリスのデザインや思想とど

の様に係わりあってきたかなどが話題となったのちに、会場からの活発な質問が相次ぎ、デザイナーとしてのモリスに関する論議が交わされ、盛会の内に「ウィリアム・モリス・デー」を終了した。